

⑥ 『月を笠に』

涙松まで歩いて後ろを振り返ってみた。萩の城下がはるか遠くに見える。

この松並木を過ぎると明木まで人家を目にすることは無くなる。いよいよ果てしない彼方へ修業と修養の旅が始まる。

昨日までの着衣は尼僧の旅衣に変わった。網代笠に十徳をはおり、胸には頭陀袋、背には着替えなど身の回りの物を包んだ風呂敷を背負ったミチの、初々しいが凜とした旅姿であった。

今日までは父親に頼るところも多かった。だがこれから先はすべてを自分の手で切り開いていかななくてはならない。

そう思うと、すつと背筋が伸びる気がした。同時に、渡しまで見送ってくれた聞心院老師が、ミチの背にそつと手を当てて

「仏はいつもあなたの傍にいらつしやる。立ち行かなくなった時はじつと心を静め、仏の手の温もりを感じて下さい。必ず明かりが見えて来るはずですよ」と言った言葉を思い出していた。

一人旅だけど本当は一人ではない。仏に見守られている。そればかりか、三回忌を済ませてのちは、人前で利之助の話をした事はなかったが、ミチの心の奥の一番深い所に仕舞った夫は、きつとミチを守ってくれる。悴坂に向かって思いを込めた一歩を踏み出そうとしてふと我に返り、ミチは急いで矢立の始めの一句をしたためた。

『月を笠に着てあそばさや旅のそら』

月は私の笠。月の出ない場所はない。月がでる場所は私の住家。私の

住家を東へ西へ、縦横無尽に旅を楽しんでみよう。そう思い定めての一句だった。

三田尻の港は大勢の人でごった返していた。こんなにも沢山の人が船に乗るのか、と驚いたがそうではなかった。半分以上は見送りの人達だった。

船に向かうミチの背後に近づいて

「もし、尼さん！」と声を掛ける者がいた。

初めて尼さん、と呼ばれて一瞬ためらったが

「そうか、私のことなのだ」と少し面はゆい思いでミチは振り返った。するとそこには、目を真っ赤に泣きはらした年増の女が立っていた。長く伸びた髪をわらしべで束ね、肩にも肘にも大きくツギが当たった着物から、浅黒い手足がのぞいている。

異様な姿に思わずひるみそうになったミチだったが、傍に七八歳くらいの男の子が立っているのに気が付いて、気持ちはずちらへ動かされなかった。

やはり浅黒く細い手足が、粗末な着物からのぞいている。

女はすがるようにミチをみつめ

「この子は難波の商家に奉公に行きます。道中が気がかりでなりません。どうぞ途中までで結構です、一緒に居てやってもらえませんか？」と懇願した。

大坂で下船したあとは京都に向かうつもりだったミチの心に逡巡の芽が兆した。

難波は方向が違う。その思いを慌てて打ち消すと

「分かりました、難波のそのお店まで私がお連れしましょう」と不安でいっぱい女の目に応えた。

年端もゆかない男の子を一人で送り出すには、よほどの事情が有るに違いない。今、この母親にしてみれば、恐らくこうする以外に方法はないのだろう。

事情を詮索すれば余計母親は辛くなるはず。ミチは黙ったままそつと手を伸ばして男の子の肩を抱いた。

細く飛び出した鎖骨だけが手に触れた気がした。これが遠く難波まで奉公に出なくてはならない理由なのか。

男の子は口を横一文字に結んで一言も喋らない。力を込めた目を見開いて母親を見据えているのは、そうしていないと涙がこぼれてしまうからにちがいがなかった。

懸命に涙をこらえているらしい様子は、何か慰めの言葉をかければたちまち崩れてしまいそうだった。

ミチは平静を装ったまま男の子を促すと船に向かって歩き出した。歩み板を先に渡らせながら母親を振り返った。

母親は見送りの人垣の一番前で、今にも追いつがって走り出しそうに両手を胸の前で広げ、声をかけたい思いをこらえて口を半分開いたまま、あふれる涙をぬぐおうともせず立ち尽くしていた。

ミチの胸の中で男の子を不憫に思う気持ちと、自分に子供は無かったが、にわかに母親になったような気持ちたちが混じり合って、初めて味わう子供をいとおしく思える自分を感じていた。

難波に着くまでは母親でいよう。